様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０２８０

研究課題名（和文）近代初期英国における寡婦・寡夫文学と若者文化との関連性についての歴史的研究

研究課題名（英文）A Historical Study of the Relationship between the Widow/Widower Literature and the Youth Culture in Early Modern England

研究代表者
滝川　睦（TAKIKAWA, Mutsumu）

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：９０１７９５７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：近代初期英国における寡婦・寡夫文学の以下の諸相を解明した。（１）近代初期英国における公共圏の成立と寡婦・寡夫文学との密接な関連性。寡婦が若い世代の女性たちと生成する近代初期英国の「公共圏」においては、男性の権力・権威が脱構築されること。（２）シェイクスピア劇においても、上記の「公共圏」が表象されていること。（３）シェイクスピア劇においては、寡婦と記憶の喪失の関連性が「公共圏」を補強する形で表象され、焦点化されること。（４)近代初期英国の若者たちによる民衆的制裁儀礼/祝祭シャリヴァリ（スキミントン、ラフ・ミュージック）が、寡婦・寡夫文学において表象されていること。

研究成果の概要（英文）：This study elucidates the following facets of the widow/widower literature in early modern England.(1)The relationship between widow/widower literature and the public sphere in early modern England. The public sphere represented in Elizabethan and Stuart literature was fashioned by the widows who were depicted as attending the pubs with youths. One of the features of the public sphere was the deconstruction of masculine power and authority.(2)In Shakespeare's plays, especially in The Taming of the Shrew and Hamlet, these public spheres are represented. (3)In the public spheres fashioned by widows in Shakespeare's plays, especially in Hamlet, the relationship between widows and the lack of memory, or oblivion, is brought into focus. (4)In the widow/widower literature of early modern England, particularly in Shakespeare's and John Webster's plays, a charivari, or the rough music, i. e. the popular ritual of sanction, is enacted in order to expel and alienate the widow or the widower.

研究分野：人文学

キーワード：近代初期英国　寡婦・寡夫文学　若者文化　公共圏　シェイクスピア　男性の権力　記憶　シャリヴァリ

１．研究開始当初の背景
研究の背景として以下の諸点が挙げられる。
（１）従来、近代初期英国の文学に関する研究において、寡婦・寡夫文学にはほとんど焦点が合わされてこなかったこと。

（２）寡婦・寡夫の表象に着目したジェニファー・パネック（Jennifer Panek）著『近代初期英国喜劇における寡婦と求婚者』(*Widows and Suitors in Early Modern English Comedy*, 2004)やドロシア・キーラー（Dorothea Kehler）著『シェイクスピア劇における寡婦』(*Shakespeare's Widows*, 2009) などは、生理学に基づいた女性の性的欲望、あるいは遺産の継承による経済的自立性と権力のみに強調をおき、家族史的、文化史的視座から寡婦・寡夫表象をとらえたり、若者文化と連動した当時の社会的変動のコンテクストの中で、寡婦・寡夫文学をとらえることがなかったこと。

（３）平成 22－24 年度に受け入れたか科学研究費補助金による研究の焦点であった、近代初期英国における奉公人文学と、本研究で焦点化する寡婦・寡夫文学が、若者文化を軸として、当時の英国社会の動態を映し出すという点で相補的関係にあることに研究代表者が気づいたこと。

２．研究の目的
本研究の目的は、近代初期英国における寡婦・寡夫文学と当時の若者文化との関連性を歴史的視座から解明することである。とくに 16 世紀から 17 世紀における寡婦・寡夫文学というジャンルを焦点化することによって、そのジャンルの特異性を明らかにし、歴史の闇に埋もれてしまった寡婦や寡夫の存在を照射する。さらに寡婦・寡夫に焦点を合わせることで、近代初期英国文学のキャノン（canon）の見直しを行うと同時に、そうした寡婦・寡夫文学の隆盛と、ロンドンをはじめとする当時の英国都市や周辺部における若者文化との関連性を、社会構造上の変動や流動性を射程に収めながら解明することが本研究のねらいである。

３．研究の方法
「研究の目的」に掲げた、本研究で焦点を合わせるべき問題点を次のような計画に従って解明した。
（１）近代初期英国における寡婦・寡夫文学を分析し、そのジャンルを同定し、作品内で表象される寡婦・寡夫像の諸相を軸に、寡婦・寡夫文学の特徴をデータベース化した。ここで分析の対象となった作品はシェイクスピア（Shakespeare）の『十二夜』(*Twelfth Night, or What You Will*, 1600)、『ハムレット』(*Hamlet*, 1601)、ジョージ・チャップマン（George Chapman）の『寡婦の涙』(*The Widow's Tears*, 1604)、ジョン・ウェブスター（John Webster）の『モルフィ公爵夫人』(*The Duchess of Malfi*, 1614)、トマス・ミドルトン（Thomas Middleton）の『寡婦』(*The Widow*, 1615)などである。

（２）近代初期英国の文学・歴史研究における、寡婦・寡夫のモチーフに着目したこれまでの研究の総括。

（３）近代初期英国における歴史的存在としての寡婦・寡夫像と、若者文化の関連性について、歴史学・文化史・社会思想史・家政学・経済学の領域横断的視座から解明した。とくに近代初期英国における喪や求愛・求婚の儀礼、あるいは五月祭、民衆的制裁儀礼であるスキミントン（シャリヴァリ）、懺悔火曜日の無礼講だけでなく、若者文化形成に影響力をもったインタルード（interlude）をも分析対象とすることによって、上記の関連性をこれまでより鮮明に浮き彫りにした。

（４）近代初期英国における寡婦・寡夫文学と社会・経済構造の流動・変動との関連性を解明した。近代初期英国の寡婦・寡夫像に布置される権力と、当時の社会的流動性の関連について一次資料を用いながら照射するのがねらいである。

（５）寡婦・寡夫をモチーフにした、古代ローマのプラウトゥス（Plautus）やテレンティウス（Terentius）の喜劇、そして 16-18 世紀イタリアのコメディア・デラルテの伝統と近代初期英国の寡婦・寡夫文学との関連性について分析した。

（６）近代初期英国における若者文化と寡婦・寡夫文学との関連性を、ドメスティシティ（domesticity）とジェンダーの概念変遷の側面から解明した。

（７）近代初期英国の寡婦・寡夫文学の系譜と、当時の若者の成型・教育との関連性を、近代初期の家政学の書、教育書、コンダクト・ブックを分析することによって解明した。

（８）上記の（１）から（７）の研究を英国図書館、ロンドン大学附属図書館、東京大学附属図書館等に収められている文献資料を活用して行い、総括した。

４．研究成果
本研究によって得られた成果は以下のとおりである。

（１）近代初期英国における公共圏と寡婦の関連性についての解明。サミュエル・ロウランズ（Samuel Rowlands）の小冊子『女三人集えばいと楽し』(*Tis Merry When Gossips Meet*, 1609）に描かれているように、たとえ

それがフィクションであるにせよ、寡婦は居酒屋で「妻」や「娘」とワインを酌み交わすことにより、17 世紀英国特有の公共圏を成立させるポテンシャリティを備えていると考えられていたことを証明した。ただし、その「公共圏」においては、男性の権力は徹底的に脱構築され、男性が疎外される、女性のジェンダー生成を中核に形成される公共圏である。

（２）上記の、近代初期英国における公共圏のヴァージョンを、シェイクスピアは『じゃじゃ馬ならし』（*The Taming of the Shrew*, 1594）の最終幕において描いている。バプティスタ家のプライヴェートな空間を舞台にして、そこに寡婦（Widow）を含んだ新婚夫婦三組が登場し、公共圏を成立させる。そしてその公共圏での最大のテーマは、キャタリーナの従順な女性への変身であるが、その変身を際立たせるために、（１）で述べた近代初期特有の男性権力剥奪の場としての「公共圏」という場が利用されているといえる。

（３）シェイクスピアの『ハムレット』においては、（１）で述べた、寡婦によって形成される「公共圏」は五幕二場の宴の場に成立している。寡婦ガートルードの周りには、サミュエル・ロウランズの小冊子や『じゃじゃ馬ならし』に描かれているような公共圏は出現していないが、『ハムレット』の五幕二場においては、ワインの瓶の並べられた宴席において、「寡婦」ガートルードが登場し、男性の権威を削ぐかのように、王クローディアスの制止を振り切って杯から毒入りのワインをあおるとき、『ハムレット』五幕二場は間違いなく、寡婦が主体となる「公共圏」と変貌する。

（４）『ハムレット』五幕二場において、男性の権力を無効にする、寡婦が主体となる「公共圏」が成立する理由は、寡婦・寡夫文学においてそもそも寡婦は、記憶を媒介にして男性の権力を無効化するポテンシャリティを備えているからである。

近代初期スペインの人文学者フアン・ルイス・ヴィーヴェス（Juan Luis Vives）の『女性キリスト教徒のための教本』（*De Institutione Foeminae Christianae*, 1524, 英訳 *The Instruction of a Christian Woman*, 初版 1529）やジョン・ウェブスターの『人間三十二態』（*Characters*, 1615）で明確に述べられているように、「普通の寡婦」は棺にかけられた「伝令官の布」と同じで、多くの葬式に顔を出すのだが、少しも「色」は変わらない。つまり、夫を亡くして涙を浮かべたかと思うと、再婚して涙を拭う、そして片手にはサックワインの杯を握り締める忘却の化身、それが「普通の寡婦」なのである。一方、「有徳/貞潔な寡婦」は追憶・記憶の化身とみなされていた。

『ハムレット』という劇そのものが、父親の復讐を果たすために、ハムレット自身の記憶を回復させることを主題としているのであるが、その「記憶の劇」のさなかにあって、寡婦ガートルードは、夫の記憶を失った忘却の化身、ウェブスターの表現を使えば、まさに「普通の寡婦」として劇中に登場するのである。

つまり、ガートルードは前夫との関係においては、忘却を媒介として男性の権威を削ぐ寡婦として表象され、五幕二場の宴＝ハムレットにとっての復讐の場においては、現在の夫＝国王クローディアスの力を無効にする存在として描かれている。

アイロニカルではあるが、五幕二場において、忘却の化身である「寡婦」ガートルードは、舞台上の「観客」と、現在観劇している、劇場の観客の心に、ハムレットの記憶を鮮明に刻印するという役を演じている。

（５）シェイクスピアの『十二夜』には、その初演当時の観劇記録（1602 年）がジョン・マニンガム（John Manningham）によって残されているが、その記録には伯爵令嬢であり「貞淑な乙女」であるオリヴィアが、「寡婦」（“widdowe”）として言及されている。この観客反応が、『十二夜』を寡婦・寡夫文学の系譜に照らしたとき、まことに的を射た反応であったことを微視的に検証した。

『十二夜』の種本のひとつであるバーナビー・リッチ（Barnabe Riche）の「アポロニウスとシラの話」（“Of Apolonius and Silla”1581）においては、オリヴィアの原型となるジュリナは、寡婦として登場する。シェイクスピアが寡婦をあえて「貞淑な乙女」としたのには、スティーヴン・グリーンブラット（Stephen Greenblatt）が指摘したように当時、「莫大な財産を残された淑女が、男性の願望を満足させる」存在であったからであることなど、種々の理由が考えられる。しかし、それにもかかわらず、本劇の「貞淑な乙女」オリヴィアと近代初期英国における寡婦像は以下のような点でスーパーインポーズされている。

第一に、オリヴィアが劇中において、（４）で言及したヴィーヴェスやウェブスターが描く、父や兄の喪に長く服する「有徳/貞潔な寡婦」として表象されていること。とくに劇中においては、オリヴィアと記憶の密接な関係性に言及されることによって、「有徳/貞潔な寡婦」としてのオリヴィアに強調がおかれている。

第二に、歴史家エイミー・ルイーズ・エリクソン（Amy Louise Erickson）が指摘したように、近代初期英国における寡婦は「経済的に夫のガヴァナンスから独立して、自分自身の財産を支配し、新たに獲得した権力を行使し暴走する可能性を秘めた、男性の不安を掻き立てる存在である」とみなされていたが、オリヴィアはまさに劇中において、宮廷風恋

愛の伝統の中で男勝りの力を揮う女性像のオーラを纏いながら、そうした男性の不安を掻き立てる存在として描かれていること。

第三に、近代初期英国における寡婦・寡夫文学において、男性登場人物たちによって、寡婦は「富裕な、性に飢えた」存在とみなされることがあるが、オリヴィアもまた執事マルヴォーリオによって、そのような存在としてとらえられていること。マルヴォーリオにとって、オリヴィアは自分が社会的なヒエラルヒーを上昇していくためのステップであり、また性的な願望・幻想を満たすための存在である。ジョン・ウェブスターの『モルフィ公爵夫人』四幕二場において演出される「見世物」（“sport”4.2.37）は、「寡婦」公爵夫人のために仕掛けられる民衆的制裁シャリヴァリ（スキモントン）であるが、『十二夜』においてオリヴィアに性的幻想をいだくマルヴォーリオに仕掛けられる種々のいたずらも、そうしたシャリヴァリ（スキミントン）とみなすことができること。

（６）『十二夜』の最初の観劇記録を残したマニンガムの記録は、本劇が『夏の夜の夢』（*A Midsummer Night's Dream*, 1595）と同様に、「寡婦」や寡夫が芝居のプロットを始動させるモメントであること、そしてこの二つの劇が近代初期の寡婦・寡夫文学の系譜にしっかりと掉さしていることを示唆している。

（７）近代初期英国における寡婦・寡夫文学においては、若者が仕掛ける民衆的制裁シャリヴァリ（*charivari*、英語名 skimmington、rough music）が表象されることがある。たとえば、（５）で挙げたウェブスターの『モルフィ公爵夫人』四幕二場の「見世物」はその最たる例である。

シャリヴァリとは近代初期を中心に広くヨーロッパで主に若者たちによって行われた制裁儀礼/祝祭である。制裁の対象となるのは再婚した寡婦や男やもめ、夫を殴る妻、妻に殴られるままになっている夫、不貞な妻、寝とられ男、共同体の娘と結婚するよそ者、男色者など、共同体の秩序を乱すと考えられた者たちである。制裁/祝祭の手段は、なべ、やかん、大釜、ふいごなどの什器や楽器を使い、騒音をたて、対象となる者たちに聞かせたり、対象者やその身代わりをろばや天秤棒に乗せて町を練り歩く。

ナタリー・ジーモン・デイヴィス（Natalie Zemon Davis）が指摘しているように『ハムレット』という劇全体を、「寡婦」ガートルードに対してハムレットが仕掛けるシャリヴァリとみなすことができるが（Davis 123）、それ以上にシェイクスピアの作品に顕著なのが、とくに寡夫に対してこうしたシャリヴァリが仕掛けられ、寡夫が共同体から追放され、放浪を余儀なくされるというパターンである。たとえば、『リア王』（*King Lear*, 1605）のリア王や、『テンペスト』（*The Tempest*, 1611）のプロスペロがそれにあたる。彼ら「寡夫」は、寡婦文学における寡婦とは違って、権力も財産も剥奪され放浪の旅にでるが、その放浪において、シャリヴァリとは異なった演劇的手段、とくに宮廷における儀礼/儀式のコードに依拠した演劇的手段によってシャリヴァリ的民衆的制裁/祝祭に対抗しようとする。リアの場合は、国王の巡幸（the progresses）を想起させる彷徨によって、そしてプロスペロの場合は、孤島において彼の白魔術によって演出される宮廷仮面劇によって、である。最終的に権力者が、再び権威や権力を取り戻すか、否かという違いはあるが、上の二つの劇から、若い世代の者たちにより、寡夫がシャリヴァリなどの民衆的制裁儀礼によって権力を喪失し、逆に寡夫が宮廷演劇的手段によって若い世代の者たちに対峙するという構図を読み解くことができる。

＜引用文献＞

① Davis, Natalie Zemon, *Society and Culture in Early Modern France: Eight Essays by Natalie Zemon Davis*, Stanford: Stanford UP, 1975, 123

② Erickson, Amy Louise, *Women and Property in Early Modern England*, London: Routledge, 1993, 153

③ Greenblatt, Stephen, *Shakespearean Negotiations: The Circulation of Social Energy in Renaissance England*, Oxford: Clarendon, 1988, 69

④ Manningham, John, *Diary of John Manningham, of the Middle Temple, and of Bradbourne, Kent, Barrister-at-Law, 1602-1603*, Ed. John Bruce, 1868, New York: AMS, 1968, 18

⑤ Webster, John, *The Duchess of Malfi*, Ed. Leah S. Marcus, London: A & C Black, 2009, 271

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 滝川　睦、女王と毒入りワインの杯―*Hamlet* における忘却と記憶術―、『名古屋大学文学部研究論集』、査読有、第６０巻、2014、37-50

② 滝川　睦、『十二夜』における寡婦としてのオリヴィア、『名古屋大学文学部研究論集』、査読有、第６１巻、2015、37-51

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計１件）
① 滝川　睦　他、英宝社、英米文学における父の諸変奏―安田章一郎先生百寿記念論集―、2016、205-224

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
滝川　睦（TAKIKAWA, Mutsumu）
名古屋大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：９０１７９５７３

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：